



秋田のホットな動物たち

小 松 守

(秋田市大森山動物園 園長)

今回は、秋田のホットな動物を取り上げたい。

ホットさは人それぞれだろうが、私は人気度がさらにアップ中の秋田犬と物議を醸し出しているクマを登場させたい。

まずは秋田犬である。読み方は「あきたいぬ」、秋田県の「あきたけん」ではないからご注意を。県北の大館あたりが原産で、昔「大館犬」とも言われていたようだ。テレビや新聞に登場、今では秋田犬のふれあい処として秋田市の中心市街地や千秋公園にも登場、さらには子犬のぬいぐるみが爆発的な人気で、観光客だけではなく、県民の人気者でもある。

フワフワ感のある丸っこさの子犬は無論可愛いが、どっしりした風貌は包容力を感じさせ、どこか人を引き付ける。東京、渋谷駅のハチ公像は誰でも知っている待ち合わせスポットだ。忠犬ぶりを描いた「ハチ公物語」は映画化され、最近ではハリウッド俳優リチャード・ギアが出演した米国でのリメイク版が出るなど世界的に話題になった。

また、今年の平昌オリンピック・フィギュアスケート・金メダリストのザギトワ選手が秋田犬を熱望し、秋田犬保存会から雌の子犬が贈られ、ますます話題沸騰。愛称は「マサル」、ザギトワさんの発想もユニークだ。

ポスター、カレンダー、テレビなどに頻繁に登場し、秋田犬（いぬ）は秋田県（けん）の観光大使的な存在感をより一層高めている。

人気の秋田犬だが、さらに秋田を発信する大物キャラクターに育てあげるためには、可愛らしさやゆるキャラ的魅力にあやかりつつも、秋田犬誕生の歴史、土地の風土や精神性といった文化的側面のアピールをこれまで以上に推し進め、秋田犬の本質とともに、人がつくりあげてきた秋田犬、その精神性や文化の主張をより一層期待したいものだ。

ただ、注意しなければならないこともある。やさしそうな秋田犬、老若男女を引きつける魅力的な動物だが、日本屈指の大型犬で闘犬の血が流れていることも忘れてはいけない。忍耐力が強い犬だからこそ、少々のことには動じないが、いざとなれば、突如として猛獣的な存在に変わらないとも限らない。不特定多数の人とふれあう際の注意と犬の気持ちを注意深く見極めておく配慮を忘れてはならない。トラブルが発生するとホットな動物は、悲劇の動物に急変してしまいかねない。動物は動物の意識の中で生きていることを忘れてはならない。

もう一つのホットな動物はクマだ。正確に言うならばツキノワグマだ。首の下、胸に白色三日月があることからそう名付けられているが、日本固有種ではなく、アジアの中央から東側にかけて広く分布し、別名ヒマラヤグマともいう。日本の個体群は、日本列島とともに大陸から分断されたものである。ヒグマがいる北海道には生息していないし、九州や四国はどうも絶滅したようだ。

クマは特異な進化を遂げた動物でもある。原始的な食肉動物の一つはピュアな食肉ハンターとしてネコ系統に、もう一つはフレキシブルな食物に適応したイヌ系統の仲間として袂を分かち進化してきた。クマの仲間は後者のグループの中で分化した。極地のホッキョクグマから南米のメガネグマまで世界に多様に放散した。なぜかアフリカとオーストラリア大陸にはいない。

ツキノワグマの食性は実に柔軟、極めて雑食性が強く、奥歯(臼歯)は人の歯のように平べったく臼状で、一見して肉食動物とは思えないほどだ。イヌの仲間は食肉動物の本性を失わず維持してきたが、クマは実に異端児的な食性で生き続けてきた。地球の自然環境が目まぐるしく変化した新生代、クマたちは時の植生環境に巧みに適応し、多様な果実、木の実、タケノコなど手当たりしだい食べる生き方を選んだのだ。

クマの仲間で最も特殊化した動物がジャイアントパンダとも言える。笹食、タケノコ食に固執するあまり、食の袋小路に入ってしまうタイトな生き方になってしまった動物だ。

閑話休題、クマの特性ともなった植物食はクマに特殊な生理ももたらした。氷河期になり植物食が強くなったクマたちは冬のやり過ごし方で大いに苦しんだはずだ。厳冬期には餌がなくなるが、トナカイのように大移動が得意な動物ではないから、その場で餌の少ない冬を耐えなければならなかった。クマたちの取った戦略は、じっと動かず春を待つこと、すなわち冬眠(冬ごもり)であった。実に巧みな逆境克服術とも言える。クマを春告獣と称する人々もいる。

現代のクマ問題の根っこは、人とクマの食性が重なっている肉食動物であるという進化特性、そんな深いところにあるようにも思えてくる。

クマ問題は秋田だけではなく、クマの生息地すべてで起きうる全国共通のことだが、秋田や雪国の人々は春に出るネマガリダケのタケノコが大好物だが、それはクマも大好物なのだ。秋田はタケノコでの痛ましい、悲しい事故が重なったことでクマは大変ホットな動物になってしまった。

問題の本質は、人と自然の関わりが変化する時代、人とクマとがともに築き上げ、暗黙の領域のようにあった境界線がところどころ破綻し、あるいは消えかけたことにあるように思える。

クマという動物の問題というより、クマの生息地と重なる地域に生きる人の生活や社会の変化、人の側に根本的な問題があるようにも思える。中山間部の農林業の低迷、山の生業では生きてゆけない農山村地域は、高齢化と人口減少、過疎化が止まず、懸命に死守してきたクマとの境界が消え始めたのだ。水が低きに流れるようにクマたちの生活領域はどんどん里地へ、あるいは市街地へと流れ始めているかのようだ。

クマは学習する。これまで自分たちが近づかなかった境界や立ち入ってはいけない領域にいた懲らしめ役がいなくなり、自由にあちらこちらに放散しはじめた。そして、さほどの苦勞もせずにおいしい木の実である果樹や農作物がまわってある餌場も見つけることができるようになった。楽をして生きる新時代のクマがどんどん育っているとも言える。人もクマも変わってゆく。

クマはやまとことばで「怖い」という意味を含んでいるというし、アイヌ語ではクマを「カムイ」と畏怖の念を持ち、共に「神」に通じる意味を含む。人と神はどこかで分けておかねばならぬように思うが、皆さんどう思われますか。